

地域情報（県別）

【長野】トンデモ医療情報の払拭がSNSでは不可能である理由-坂本昌彦・「教えて！ドクター」責任者に聞く◆Vol.3

2020年7月3日（金）配信 m3.com地域版

スマートフォンアプリのダウンロード数14万、ツイッターフォロワー数3万3000の医療情報啓発プロジェクト「教えて！ドクター」。責任者の坂本昌彦氏（佐久医療センター小児科医長）は情報発信を続けてきた自身の経験を踏まえ、「SNSでは間違った医療情報は払拭できない」と話す。その理由はインターネットとSNSから生まれる閉鎖性にあった。情報を伝えるときに重視している姿勢、子どもを巻き込む今後の展開についても聞いた。（2020年3月25日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——「医療情報を発信する上でSNSだけでは限界がある」。前回の記事で先生がそう話していた理由をお聞かせください。

医師がSNSで情報を出す背景には「がん治療に関する怪しい情報に騙されないでほしい」、小児科医であれば「子どもにはちゃんとワクチンを打たせてほしい」といったように、総じて「正しい医療を知ってほしい」という思いがあるのではないのでしょうか。そう思って行動する医師が増えるのは素晴らしいことですが、一方で、SNSだけではこの問題は解決できないと私は考えています。

なぜかという、SNSでは価値観や考えの似ている人同士がつながりやすく、さらに自分の投稿がリツイートされてそれへの同意見や賛辞を見る機会が増えると、結果的に自分の考えや信念が強まる恐れがあるからです。これを「エコーチェンバー現象」と言います。それに、インターネットではそもそも検索エンジンの学習機能によって自分が好ましいと思う情報が優先的に表示されます。インターネットはオープンである一方、活用方法によってはどんどんクローズになってしまうわけですね。

こんな特性のある世界の中だけで情報を出していたとしても、限界があるのではないのでしょうか。医療の分野ではたとえば、「ワクチン賛成派」と「ワクチン反対派」がそれぞれの意見を主張したとしても、一方に属する人たちが自分たちの「仲間」を支持するに留まり、相手側の意見は見ない、ミュートする、ブロックするということを繰り返すのではないかと、対等な議論にならないのではないかと懸念しています。



坂本昌彦氏

——だからこそ、先生は保育園へのお出前講座を2015年から継続していると。

はい。アナログでの情報発信のいいところは「すぐに閉じられない」ことです。たとえばお出前講座は参観日や行事などいろんな保護者が集まっているときに行きますから、私が「ワクチンは打った方がいいですよ」と話したとして、その内容が自分の考えに相いれないものであったとしても、すぐにその場は離れづらいでしょう。あとは私の伝え方次第になりますが、私の話を聞く中で新しい情報を知り、「あ、そうなんだ…」と徐々に保護者の考えが変わっていく可能性はあると思います。少なくとも、自分にとって好ましくない情報を聞ききっかけにはなるわけです。

——確かに、講座の最中に自分だけ立って出ていくのは気まずいかも。学校の授業に似ているなと思いました。その上で、先生はどんな伝え方を心がけているのでしょうか。

「根拠のない医療情報を伝えないこと」「易しく、優しく表現すること」です。

情報の質を高く維持し続けるのは難しいことですが、私であれば伝えたいことの根拠となる文献の一字一句を確かめ、不安の残る部分は複数の同僚に確認してもらってリスクヘッジを図ってから発信するようにしています。その意味では勤務医であることが強みになっていますね。

「易しく優しく」というのは、「理解がしやすい上に相手を傷つけない表現」を意味しています。医療の専門的なことをかみ砕いて書いたり話したりしつつ、上から目線にならないこと。これは私も気を付けたいといけませんが、医師としては普通に話しているつもりでも、患者さんからすれば上から目線に感じたり、自分を否定されているような気持ちにさせてしまうことは往々にして起こり得ます。

特に医師がやってしまいがちなのが、根拠を示しながら「だからこれが正しいんだよ」と相手を突き放してしまうこと。でも、相手としては医師が上から目線だとまずそれに拒否反応を起こしますし、また仮にデータを見せられてもそれが自分の考えと違うものであれば素直に受け取らず、その内容のあらを探し出し、結局のところ不審の目は消えない、ということになりかねません。

ですから、「データを見せれば人は納得するはず」という考えを捨てて、「なぜこの人はそう考えるようになったのだろう」と相手を理解しようとする姿勢を持ち、また見せる必要があるのではないのでしょうか。

——「相手を理解しようとする姿勢を見せる」。対面では可能だと思うのですが、SNSなどのネット空間では難しいのではないのでしょうか。

そうですね。これをデジタルでやるのは難しい…。ただ、「教えて！ドクター」の場合、テキストに添えられているイラストがいい緩衝材になってくれていると思います。江村康子さんの描く温かみのあるイラストが文章を読んでもらうきっかけになっているのではないかと。少なくとも責められている感じはしませんし、子どもや親のイラストがあることで、「そうそう」「そうなんだよね」と視覚的・瞬間的に共感を得やすくなっているのではないのでしょうか。

寓話の『北風と太陽』で言うと、「教えて！ドクター」は北風ではなく太陽のような姿勢で情報の受け手に接していることと思っています。柔らかく、温かく接して、最終的には適切な行動を促せようになるとベストかなと。

——日ごろは医師として診療し、佐久市の医師たちと出前講座を行い、さらにデジタルで種々の発信も行う。なぜそこまでやるのですか？先生自身はお金をもらっていないそうで、何がモチベーションになっているのかなと。

出前講座に協力していただいている開業医の先生方には派遣費をお渡ししていますが、このプロジェクトを進めるに当たって私自身は収入を得ていません。

なぜやるか…。一つはフライヤー（医療情報が載ったイラスト込みの画像データ）をまとめるのが勉強になるんですよ。いろいろ調べて一つの物を作るのが単純に楽しい。一つ作るには文献を10から20は読み込まないといけないので、その間に自分の知らなかったことをどんどん知れます。

それは日常臨床にも生かせます。今までバシッとうまく説明できなかったことがきめ細やかに患者さんに話せるようになりますし、自分で作ったフライヤーは電子カルテに保存しているので必要に応じて出力し、患者さんにお渡しすることもできます。自分の診療の質が上がるのは医師としてうれしいことです。

それと、やっぱり出前講座の参加者やSNSのフォロワーさんから「この情報は助かる！」などと言われるのはモチベーションになります。

——仕事が好きで学ぶのが好き、そして人から喜ばれるのが好きと。先生を取材するのは佐久市が取り組む「地蔵健診」に続いて2回目ですが、個人的には医療職を問わずいろいろな人とフラットに交流できる人柄も活動の広がりに関係しているように思います。今後の展開についてはいかがですか。

今までは主に親に向けて情報発信してきたのですが、これからは子どもにもアプローチしていきたいですね。子どもにも楽しんで医療のことを学んでもらい、子どもから大人を啓発する流れもできないかなと。

佐久市の地蔵健診に協力しているのもそれが理由の一つで、「教えて！ドクター」としても既に取り組んでいます。一つが子どもの病気やホームケアの情報を短い標語にしてイラストを添えた「医療かるた」。Instagramに

画像データをアップしたり、紙に出力して市内のイベントで子どもたちに遊んでもらったりしています。将来的には製品化したいです。

もう一つが「感染症すごろく」で、これは「くしゃみが飛ぶ距離はおよそ2m。実際に測ってみよう」など各マスに書かれたミッションをこなすことで感染症の予防法などを学ぶもの。感染症すごろくも過去にイベントで子どもたちに体験してもらいました。このときはテーブルの上で行ったのですが、後々には巨大すごろくも作り、大きなステージで親子が歩きながら遊べる企画も立てたいと考えています。こんな取り組みを通して子どもと親の間に医療に関する会話が交わされるようになれば、親と子双方の医療リテラシーが上がる可能性があります。

それと、プロジェクトの多言語化も実現させたいです。やはり言葉の壁は医療受診をためらわせるので、まずは各フライヤーを英訳してそれを順次サイトやツイッターにアップしていきたいと思います。これも現在進行中で、翻訳家などがボランティアとして手伝ってくれています。



インスタグラムにアップされているからの画像

——最後に、読者である医療関係者にメッセージなどあればお聞かせください。

医療者は忙しい人が多いので、現実的には私のように病院から出て啓発できる人は少ないかもしれません。それはそうだと思うのですが、地域での活動は病院の中だけでは生み出せない価値があるので、そのことは胸に留めてもらえるとうれしいです。不要な外来・救急受診が減るなど医療者にもメリットが生まれる可能性があると思います。

そして、一人でも多くの医療者にこういった啓発活動に参加してもらいたいですね。「ワクチン接種が大事だよ」と一人の医師が言うよりも、多くの人が対面・遠隔を合わせて言い続けるほど効果が増すのではないのでしょうか。

◆坂本 昌彦（さかもと・まさひこ）氏

2004年名古屋大学医学部卒。厚生連安城更生病院や県立南会津病院、タイやネパールでの勤務を経た後、2014年に佐久総合病院グループの佐久医療センター小児科医長に着任。2015年から子どもの病気やホームケアについて伝える佐久医師会のプロジェクト「教えて！ドクター」の責任者として活動する。専門は小児救急や国際保健。日本小児科学会小児科専門医。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

